

入唐僧円仁と南忠

慈覚大師円仁（794～864）は、第19次遣唐使に随行して唐に渡り、帰国して天台宗山門派の祖となった僧侶です。「入唐求法巡礼行記」（以下「行記」）は、円仁が記した出発・渡唐から帰国までの紀行日記です。この「行記」の叙述が貴重であるのは、これによって当時の遣唐使の動向や、あるいはまたその途上における新羅人との交流などを詳細に知ることができる点にあります。

円仁は、承和14年（847）9月、日本へ帰国します。すなわち、『行記』同年9月18日条に「鴻臚館の前に到りぬ」、翌19日条には「館に入りて住まる」とあって、円仁が帰国後、大宰府鴻臚館に滞在していたことが知られます。円仁ら一行は、速やかに上京するよう命じられますが、円仁はこれを断り、しばらくの間、大宰府にとどまっていたようです。それは入唐の際に、その無事を祈っておこなった請願を果たすためであったと考えられ、11月28日から12月3日にかけて、大宰府大山寺において、竈門大神、住吉大神、香椎名神、香春名神、八幡大菩薩の諸神に対して金剛般若経五千卷

太宰府人物志

資料室だより⑧

の転読を行っています。そして12月14日の「午後、南忠闍梨が到来せり」という記事をもって、『行記』は終わっています。

この点について、ハーバード大学教授で、日本史研究者であったエドウィン・ライシャワー氏は、円仁の『行記』は、素性も、そしてその出身もよく分からない一人の僧侶の到来を記して、当惑するような唐突さで終わっている、と述べています（Emin's Travels in T'ang China）。

これに対して小野勝年氏は、南忠は円仁の弟子の一人であり、その入唐中は忍辱峰（非行非坐三昧院）の留守を預かり、また『慈覚大師伝』によれば伝燈大法師位を授けられた僧であることなどをあげ、「この簡単な日記の一節には遠く叡山から、恐らく側近の弟子たちの代表もかねて、わざわざ迎えにやって来た厚情に対して、身にしみる感激をひそめているのではあるまいか」と解釈しています（『入唐求法巡礼行記の研究』）。

わたくしはもちろん、小野氏の解釈に軍配を上げたいと思うのですが、皆さんはいかがでしょう。

市史資料室 重松 敏彦